



Title	「詩語」という語について
Author(s)	後藤, 秋正
Citation	札幌国語研究, 13: 1-10
Issue Date	2008
URL	http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/2487
Rights	

「詩語」という語について

後藤秋正

はじめに

「詩語」という語は、しばしば用いられる語でありながら、明確な定義をもたない語であると思われる。性急に語の定義を下す前に、この語が中国の古典においてはどのような用いられてきたのか、本稿においてはこの辺の事情を探ってみることにしたい。

—

『諸橋大漢和辞典』は、「詩語」を「詩のことば」として、まず『漢書』卷二十二、礼楽志の一文を引く。

其威儀足以充目、音声足以動耳、詩語足以感心、故聞其音而德和、省其詩而志正、論其数而法立。

其の威儀は以て目に充つるに足り、音声は以て耳を動かすに足り、詩語は以て心に感ぜしむるに足る、故に其の音を聞きて徳は和し、其の詩を省みて志は正しく、其の数を

論じて法は立つ¹⁾。
また、この詩はのちに取り上げることにするが、『諸橋大漢和辞典』は、張籍「和左司元郎中秋居十首」〈其の四〉詩中の句も引いている。

いつぼう、『漢語大詞典』は、「詩的言語。」として、同じく『漢書』礼楽志を引いたのちに、宋・劉攽（一〇二二—一〇八八）の「和楊十七傷蘇子美」（『彭城集』卷八）の句、

窮途詩語尤慨慷 窮途の詩語 尤も慨慷

暮年筆法加豪逞 暮年の筆法 加ます豪逞

を引く。

『諸橋大漢和辞典』と『漢語大詞典』は項目を立ててはいないが、『詩経』の詩に用いられる語彙という意味で用いられることも、当然のことが多い。例えば明・李先芳『讀詩私記』卷一、「論小序」に見える四例の「詩語」は、すべてこの意味で用いられている。ただし、以後の考察ではこの用例は除外することとする。

確かに詩語という語は、詩のことは、詩中に用いられることば、であるには違いない。それでは詩語という語はいつごろから用いられたのか、また、どのような場面で用いられてきた言葉なのであろうか。その様相をたどっておくことは、特定の詩人が用いる詩語を考究するうえで、まったく無意味なことではないだろう。

二

「詩語」の、詩中における用例は南北朝期までは見られないようであり、最も早い用例は、貞元十五年（七九九）の進士である張籍の「和左司元郎中秋居十首」〈其の四〉（『張司業集』卷三、『全唐詩』卷三二八四）に見えるものであると思われる。

自知清静好 自ら清静の好きを知り

不要問時豪 時豪に問うを要めず

就石安琴枕 石に就きて琴枕に安んじ

穿松压酒槽 松を穿ちて酒槽を压す

山情因月甚 山情 月に因りて甚し

詩語入秋高 詩語 秋に入りて高し

身外無余時 身外 余時無し

唯応筆硯勞 唯だ筆硯の勞に応えんのみ

元郎中は元宗簡（？）八二三）、字は居敬のこと。尚書郎などを経て、京兆丞尹で終わつた。白居易によって宝曆元年（八二五）の十二月に書かれた「故京兆元少尹文集序」（『全唐文』卷六七五）によれば、「格詩一百八十五、律詩五百九」のほか、

賦、述、銘などの著述があつたというのだが、すべて伝わらない。この「序」には、元宗簡が臨終に際して息子の元途に遺言したことが、次のように記されている。

將啓手足、無他語。語其子途云、吾平生酷嗜詩、白樂天知我者、我沒、其遺文得樂天為之序、無恨矣。

將に手足を啓かんとして、他語無し。其の子の途に語つて云う、吾 平生 酷だ詩を嗜む、白樂天は我を知る者なり、我没して、其の遺文 樂天 之が序を為ることを得れば、恨むこと無しと。

元宗簡の詩作への没頭ぶりと後世に伝えようとする執念を伝える逸話であらう。

張籍と交遊があつた姚合（七七九？）八四六？）にも、元宗簡の「秋居」に和した五律「和元八郎中秋居」（『全唐詩』卷五〇一）があるが、こちらは元宗簡の生活ぶりを「散仙」に喩えることに主眼が置かれていて、その詩には言及しない。李冬生『張籍集注』（黄山書社、一九八九）は、第六句について、「詩語」句、秋色容易引起詩人的情懷、到了秋天、詩興更濃。」と云う。何らかの事情で閑居していた元宗簡が秋という季節に触発された興趣、その興趣を表現した詩中の語が高い境地に達していたのである。連作の末尾に位置する〈其の十〉において、張籍は元宗簡の詩に言及している。

客散高齋晚 客は散ず高齋の晩

東園景象偏 東園 景象偏なり

清明猶有蝶 清明 猶お蝶有り

涼冷漸無蟬 涼冷 漸く蟬無し

藤折霜來子 藤は折る霜來の子

蝸行雨後涎 蝸は行く雨後の涎よだれ

新詩纈上卷 新詩 纈むすかに巻に上れば

已得滿城伝 已に滿城に伝わるを得たり

元宗簡の新しい詩がようやく完成するとすぐに都中に広まったといふのであるから、多少の誇張は含まれてはいたにしても、張籍が彼の詩に強い関心を抱いていたことは間違ひなからう。

張籍にはこの詩を含めて、「雨中寄元宗簡」(『張司業集』卷一、

『全唐詩』卷三三三)、「寄元員外」(『張司業集』卷五、『全唐詩』

卷三八五)、「移居靜安坊答元八郎中」(同上)、「哭元九(八)

少府(尹)」(同上)など、彼との交遊から生まれた詩が九首残

されている。「哭元八少尹」は次のような詩である。

平生志業独相知 平生の志業 独り相い知る

早結雲山老去期 早つとに結ぶ雲山老いて去かんとするの期

初作学官常共宿 初め学官と作りて常に宿を共にし

晚登朝列暫同時 晩に朝列に登りて暫く時を同じくす

閑來各数経過地 閑來 各おの数しば地を経過し

醉後齊吟唱和詩 醉後 齊しく吟じて詩を唱和す

今日春風花滿宅 今日 春風 花 宅に滿つ

入門行哭見靈帷 門に入り行くく哭して靈帷を見る

陶敏『全唐詩人名彙考』(遼海出版社、二〇〇六)の、張籍「書

懷寄元郎中」(『全唐詩』卷三八五)の条では、「元郎中」を説

明して、「宗簡元和末・長慶初為郎中、時籍官国子博士。籍前

为国子助教、故詩云『重為学官。』」と言っている。「哭元八少尹」

の頷聯も、二人が国子監で知り合い、交流を深めたことを言う。

このように張籍がしばしば元宗簡の詩に言及するのは、「哭

元八少尹」の頷聯からも窺われるように、長きにわたる交遊に

ともなつて生じた彼の詩文への共感があつたからである。そ

のような共感と関心が、以前の詩には用例を見ない「詩語」の

語を用いさせたものである。あるいは、王建(七六六?—八

三四?)の七律「題元郎中新宅」(『全唐詩』卷三〇〇)に、謙

遜しながら元宗簡の詩を称賛した句、

7 雖有好詩出名字 好詩有りて名字を出だすと雖も

8 倍教年少損心神 倍たがます年少をして心神を損なわしむ

があつて、「好詩」の語を用いていることも彼の脳裏にあり、

この語を慎重に避けたものかもしれない。

ついで「詩語」が見えるのは、貫休(八三二—九一一)の五

律「江西再逢周鍾」(『禪月集』卷一五、『全唐詩』卷八三三)

である。

六七年不見 六七年見ず

相逢鬢已蒼 相い逢うて鬢已に蒼たり

交情終淡薄 交情は終ついにに淡薄なるも

詩語更清狂 詩語は更に清狂なり

未得丹霄便 未だ丹霄の便を得ず

依前四壁光 依前たり四壁の光

但令吾道在 但だ吾が道をして在らしめば

晚達亦何妨 晩達も亦何ぞ妨げん

周璉の詩文は残されておらず、その事績は不詳である。ただし、陸永峰『禪月集校注』（巴蜀書社、二〇〇六）は『咸淳臨安志』巻八一、寺觀七にある次の記載を引いている。

淨信院、在桐扣山。天福六年、邑人周璉捨宅為寺。旧名恩平。治平二年、改今額。

淨信院は、桐扣山に在り。天福六年（九四二）、邑人周璉 宅を捨てて寺と為す。旧名は恩平。治平二年（一〇六一）、今の額に改む。

桐扣山は、浙江省余杭市の西南にある山。『禪月集校注』はこの一文について、「或即此人。」と言っている。そうだとすれば周璉は、後の貫休の詩から確認できるように、科挙を目指したこともある在家の仏教信者だったことになる。また、貫休にはこの詩のほか、彼に言及した二篇の詩、五律「閩閩廷言周璉下第」（『禪月集』巻一七、『全唐詩』巻八三三）と七律「春末寄周璉」（『禪月集』巻二〇、『全唐詩』巻八三五）が残されている。後者の起・領聯には、次のように言う。

暮角含風雨氣曠 暮角 風を含んで雨氣曠り

寂寥苜蓿翠上衣 寂寥 苜蓿 衣巾に上る

道情不向鶯花薄 道情は向かわず鶯花の薄きに

詩意自如天地春 詩意は自ずから天地の春の如し

先の詩では「詩語は更に清狂」と言い、この詩では周璉の詩のおもむきが「天地の春」のようだと言う。「清狂」の語は、早くは『漢書』巻六十三、武五子伝に、劉賀を評して、「察故王衣服言語跪起、清狂不惠。」（故王の衣服、言語、跪起を察す

るに、清狂にして恵からず。）と見えており、蘇林の注に、「凡狂者、陰陽脈尺濁。今此人不狂似狂者、故言清狂也。或曰、色理清徐而心不慧曰清狂。清狂、如今白癡也。」（凡そ狂者は、陰陽の脈、尽く濁る。今此の人は狂せざるに狂者に似る、故に清狂と言うなり。或いは曰う、色理は清徐にして心は慧からざるを清狂と曰う。清狂は、如今の白癡なりと。）と言っている。しかし、唐代においては、清狂の語に別の側面が見出されている。例えば杜甫の詩にこの語は三例が見えている。「遣興五首」〈其の四〉（『杜詩詳注』巻七）に、賀知章のことを称して、

賀公雅異語 賀公 雅に異語し

在位常清狂 位在るも常に清狂なり

と言ひ、同じく「壯遊」（『杜詩詳注』巻一六）に、自身が齊趙の間を気ままに旅したことを、

放蕩齊趙間 放蕩たり齊趙の間

裘馬頗清狂 裘馬 頗る清狂なり

と言う。また、「遣悶、戲呈路十九曹長」（『杜詩詳注』巻一九）では、次のように言っている。

晚節漸於詩律細 晚節 漸く詩律に於いて細なり

誰家數去酒盃寬 誰が家にか数しば去きて酒盃寬ならん

唯君最愛清狂客 唯だ君 最も愛す清狂の客

百遍相過意未闌 百遍 相い過ぎるも意未だ闌ならず

『杜詩詳注』は、杜甫が「清狂の客」と自称していることについて、「清狂客三字、曠懷豪興、兼而有之、公之自命甚高。」（清狂の客の三字は、曠懷と豪興と、兼ねて之有り、公の自ら命く

ること甚だ高し。」と指摘している。曠懷とは心にこだわりのないこと、豪興とは豪放なおもむきをもっていることである。つまり、言い換えれば、不羈奔放なこと、世俗の規範から逸脱して一途なことであるから、貫休は、周璉の詩のおもむきには春風駘蕩としたところがあり、用いる語彙には平凡ではない放逸な側面があることに着目していたことになる。

唐詩においては、以上に見たように、張籍と貫休の詩以外には「詩語」の用例はない。

三

では、このほかに唐詩に関して詩語という語が用いられることはないであろうか。『唐才子伝』巻二には、次のような記載がある。

閻防、河中人。開元二十二年、李琚榜及第。顔真卿甚敬愛之、欲薦于朝、不屈。為人好古博雅、詩語真素、魂清魄爽、放曠山水、高情独詣。於終南山豐德寺、結茅茨讀書。百丈溪是隱処。題詩云、……後信命不務進取、以此自終。有詩集行世。

閻防は、河中の人。開元二十二年（七三四）、李琚の榜の及第。顔真卿 甚だ之を敬愛し、朝に薦めんと欲するも、屈せず。人と為り好古・博雅にして、詩語は真素、魂は清く魄は爽やかにして、山水に放曠し、高情は独り詣る。終南山の豊徳寺に、茅茨を結んで讀書す。百丈溪は是れ隠れし処。詩を題して云う、……と。後 命に信せて進取に努

めず、此を以て自ら終わる。詩集有りて世に行なわる。

「為人」以下の一文は、殷璠『河岳英靈集』の閻防の条を踏まえたものであることが、布目潮風・中村喬『唐才子伝之研究』（汲古書院、一九八二）、傅璇琮『唐才子伝校箋』（中華書局、一九八七）などにおいて既に指摘されている。『河岳英靈集』巻下には次のようにある。

防為人好名博雅、其警策語多真素。至如「荒庭何所有、老樹半空腹」、又「熊榿庭中樹、竜蒸棟裏雲」、皎然可信也。防は人と為り好名・博雅にして、其の警策の語は真素多し。「荒庭 何の有る所ぞ、老樹 半ば腹を空しくす」、又「熊榿 庭中の樹、竜蒸 棟裏の雲」の如きに至っては、皎然として信すべきなり。

ここでは、『唐才子伝』では「詩語」となっていた部分が「警策語」となっている。つまり、『河岳英靈集』が編集されたのは天宝年間（七四二―七五六）のことであろうから、その当時は、詩語という語が一般的にはなっていないことを示しているよう。

ちなみに、宋代に入ると「詩語」が詩中にしばしば用いられるようになる。「漢語大詞典」は劉攽の詩を例として引いているが、その他の例をいくつか引いておこう。

まず、宋庠（九九六一―一〇六六）の「屯田任君数以歌詩授余 感嘆不足因成答贈」（『元憲集』巻二二）の例。

緑髮仙郎藻思新 緑髮の仙郎 藻思新たに
就中詩語更通神 就中 詩語 更に神に通ず

また、梅堯臣（一〇〇二—一〇六〇）の「將離宣城吳正仲」（『宛陵集』卷三六）の例。

吳均詩語多奇揭 吳均の詩語 奇掲多し

苦情鴛鴦謝明月 苦ねんごろに鴛鴦に情こころい明月に謝す

ついで、強至（一〇二二—一〇七六）の「贈霞長老」（『祠部集』卷五）の例。

定心馴海鳥 定心 海鳥に馴る

詩語淡秋雲 詩語 秋雲より淡し

そして、蘇軾（一〇三六—一一〇一）の「京師哭任遵聖」（『東坡全集』卷八）の例。

文章小得譽 文章は小おきなきより譽れを得

詩語尤清壯 詩語は尤も清壯たり

最後に黃庭堅（一〇四五—一一〇五）の「宿旧彭沢懷陶令」（『山谷集』卷四）を引いておこう。

潜魚願深渺 潜魚は深渺を願うも

淵明無由逃 淵明は逃のがるるに由無し

……

歲月閔江浪 歲月 江浪を閔

空余詩語工 空しく余す詩語の工たくみなるを

このほか、詩話の類にも「詩語」は頻出するが、引用は省略する。

四

「詩語」ではなく、「詩言」の語が用いられることもあった。

喻鳧（八一〇？—八五〇？）の「冬日題無可上人院」（『全唐詩』卷五四三）には、次のように見えている。

詩言与禅味 詩言と禅味と

語黙此皆清 語るも黙するも此れ皆清し

齊己（八六四—九四三）には「詩言」が二例が見える。「送休師帰長沙寧観」（『白蓮集』卷八、『全唐詩』卷八四五）では次のように詠ずる。

他日更思衰老否 他日 更に衰老を思うや否や

七年相伴琢詩言 七年 相い伴って詩言を琢ひがく

また、「酬光上人」（『白蓮集』卷一〇、『全唐詩』卷八四七）でも、

禅言難後到詩言 禅言 後を難じて詩言に到いたる

坐石心同立月魂 石に坐すれば心は月に立つ魂と同じ
と言っている。注意したいのは、これらの詩における「詩言」

は、いずれも仏寺や仏僧との関連で用いられていることである。齊己は「逢詩僧」（『白蓮集』卷五、『全唐詩』卷八四二）において、

禅玄無可並 禅の玄なるは並ぶべき無く

詩妙有何評 詩の妙なるは何の評せらるることか有らん

と述べ、「自題」（『白蓮集』卷六、『全唐詩』卷八四三）において、

禅外求詩妙 禅外 詩の妙なることを求め

年来鬢已秋 年来 鬢かみ已に秋なり

と述べて、禅に象徴される仏教的世界と詩に象徴される文学的

世界とを描いているから、「禪言」は仏典に用いられる言葉、「詩言」は詩の創作に用いられる言葉と解してよからう。晩唐期の詩をよくする人々のあいだでは、「詩語」と同様の意味で「詩言」が用いられていたのかもしれない。

おわりに

「詩語」という語が登場する以前は、ただ単に「語」が用いられたこともある。杜甫（七一・二一七七〇）の「江上值水如海勢聊短述」（『杜詩詳注』卷一〇）は、そのよく知られた例であろう。

為人性僻耽佳句 人と為り性 僻にして佳句に耽る

語不驚人死不休 語 人を驚かさずんば死すとも休まず

「故右僕射相国曲江張九齡」（『杜詩詳注』卷一六）中に見える「語」は、張九齡の詩のことばが清らかですっきりしていることを言う。

詩罷地有余 詩罷みて地余り有り

篇終語清省 篇終りて語清省なり

さらに「解悶十二首」（其の六）（『杜詩詳注』卷一七）では、孟浩然の没後、襄陽の長老たちの作る詩のことばは新味に欠けることを次のように言う。

即今耆旧無新語 即今 耆旧 新語無く

漫釣槎頭縮頸鱸 漫に釣る槎頭 縮頸の鱸

また、「詞」が用いられることもあった。これも杜甫の詩から引いておこう。「戲為六絶句」（其の五）（『杜詩詳注』卷一一）

には次のように言う。

不薄今人愛古人

今人をかう薄んぜず古人を愛す

清詞麗句必為鄰

清詞 麗句 必ず鄰を為す

杜甫の詩に「詩語」が見えず、もっぱら「語」、または「詞」を用いているのは、「詩語」という語を、語られる言葉などと厳密に区別して用いようとする意識が稀薄だったことを示している。つまり、詩人の意識は、「佳句」や「詞句」、つまり句の構造そのものに向かうことが多く、詩語そのものに向けられることはまれであったと考えられる。「詩語」もしくは「詩言」自体に視線が向けられるようになったのは中唐に到ってからであろう。この語は張籍の詩に先駆的に用いられ、ついで喻蘧や貫休の詩にも用いられるようになった。それが宋代に入るといっそうの拡大を見せるようになる。このような状況を反映させたのが、『唐才子伝』における用例であったのだろう。

さて、魏慶之『詩人玉屑』卷八に、『金針格』を典故として引かれる「煉句」の条には次のように言っている。

煉句不如煉字、煉字不如煉意、煉意不如煉格、以声律為
竅、物象為骨、意格為髓。

句を煉るは字を煉るに如かず、字を煉るは意を煉るに如かず、意を煉るは格を煉るに如かず、声律を以て竅と為し、物象を骨と為し、意格を髓と為す。

詩中の句を練ることのほうが、詩中の字を練るよりも重要であり、風格が最も重要であるとするのである。

この条の指摘は詩を作る者に一定の影響を与えたようであっ

て、例えば、宋・曾慥『類説』卷五十一の「詩竅」と「鍊句」の条、宋・張鑑『仕学規範』卷三十七にも『続金針格』を出典として、さらに元・王構『修辭鑑衡』卷一の「詩体」の条にも『金針格』を出典として同様の部分⁽⁸⁾が引かれている。つまり、『金針格』、もしくは『続金針格』の、編者と成立時期には問題があるとしても、「煉字」よりも「煉句」が、「煉句」よりも「煉意」が、「煉意」よりも「煉格」が重要であるとする考えがはっきりと打ち出されている。唐代においてこのような考えがどの程度普及していたかを窺い知る手がかりはないが、あるいは唐詩に「詩語」という語の用例が少ないことの背景を示しているかもしれない。

注

- (1) この「詩語」は、この一文の前にある「国子者、卿大夫之子弟也。皆学歌九德、誦六詩。」(国子とは、卿大夫の子弟なり。皆な歌の九徳を学び、六詩を誦す。)及び「詩言志、歌咏言。」(詩は志を言い、歌は言を咏ず。)という文中の「詩」の言葉を指しているよう。前者は特に『詩経』の詩を、後者は、同じ礼楽志に、「安世房中歌十七章、其詩曰、……」、「郊祀歌十九章、其詩曰、……」などあるように、宮中で演奏された楽曲の歌詞を指すと考えられる。

- (2) 四庫全書本『唐才子伝』はこの部分を「為人好読書、好古博雅、詩語真素。」に作る。

- (3) 劉資虚「寄閩防」(『全唐詩』卷二五六)の題下注に、「防時在終南豐徳寺読書。」(防は時に終南の豊徳寺に在りて読書す。)とある。この部分の記述は、これに基づいたものであろう。

- (4) 『唐詩紀事』卷二十六はこの部分を、「防為人好名博雅、其詩警策、語多真素」に作っている。つまり、同じく『河岳英靈集』を下敷きにしても、詩語の語を用いたのは、『唐才子伝』が早いということになる。

- (5) 『河岳英靈集』には閩防の条のほか、卷上、常建の条にも、常建の不遇を嘆じたのちに、「……此例十数句、並可称警絶。」(……此の例の十数句は、並びに警絶と称すべし。)と言う。また、「警策」の語は、『唐才子伝』には四例、『唐詩紀事』には五例がある。なお唐詩には、杜甫「戲題寄上漢中王三首」(其の三)『杜詩詳注』卷一一)の、「尚憐詩警策、猶記酒顛狂」(尚、憐れむ詩の警策、猶、記す酒の顛狂)という一例しか見えないようである。

- (6) 一句目は、仮に『中国歴代僧詩全集』卷下(当代中国出版社、一九九七)が、「難、弁難。」と注するのに従ったが、一句の意味はよくわからない。なお、「禪言」については、「泛指有関仏教的言談。」としている。

- (7) 『唐才子伝』の、これに続く「煉意」の条には、范温『詩眼』(『潜溪詩眼』)を引いて、

世俗所謂楽天金針集殊鄙淺。然其中有可取者。

鍊句不如鍊意、非老於文學、不能道此。又云鍊字不如鍊句、則未安也。好句要須好字。

世俗の所謂 樂天の金針集は殊に鄙淺なり。然るに其の中 取るべき者有り。句を鍊るは意を鍊るに如かずとは、文學に老るるに非ざれば、此れを道う能わず。又 字を鍊るは句を鍊るに如かずと云うは、則ち未だ安んぜざるなり。好句は好字を須もちいるを要す。

と言っているから、必ずしも「鍊句」を「鍊字」の上位におくという考えが全面的に受け入れられていたとは言えない側面はある。

(8) 『金鍼詩格』、『金針詩格』とも表記される。普通、『金鍼詩格』は白居易撰、『統金鍼詩格』は梅堯臣撰とされている。この点については張伯偉編撰『全唐五代詩格校考』(陝西人民教育出版社、一九九六)に考察がある。

〔補注〕

日本においては、江戸時代以降、「詩語」の語を冠した書物がしばしば刊行されている。わずかに確認し得ただけでも、次のような書物があつて、盛行ぶりがうかがわれる。

積大典(顯常)撰『詩語解』宝曆一三年(一七六三)刊

玄圃大江先生口授『詩礎国字解』安永六年(一七七七)刊

玄圃大江先生口授『詩語国字解』天明元年(一七八二)刊

熊山沢先生(沢三郎)輯『詩語群玉』弘化四年(一八四七)刊

『詩語解』の「題引」の冒頭部分を引用してみよう。

詩之与文体裁自異、而其於語辭亦不同其用。大抵詩之為言、含蓄而不及、錯綜而不直、而其所使之能如是者、正在語辭斡旋之間。詩文之所以別、唐宋之所以殊、率皆以此。語辭於詩不亦要乎。然初学者、多胡乱使用、填塞句間、不復能考明。故今一一拳録、從頭解之、以為詩家之筌蹄。尚覽者、勿嗤其猥雜以逆叩兩端之志可也。

詩と文とは体裁自ずから異なり、而して其の語辭に於けるや亦其の用を同じくせず。大抵 詩の言為るや、含蓄に於けるや、錯綜にして直ならず、而して其の之れをして能く是の如くならしむる所の者は、正に語辭・斡旋の間に在り。詩文の別なる所以、唐宋の殊なる所以は、率おぼね皆な此を以てす。語辭の詩におけるや亦要ならざるか。然るに初学の者、多く胡乱に使用し、句間に填塞し復た能く考明せず。故に今一一に拳録し、從頭之を解し、以て詩家の筌蹄と為す。尚こゝがわくは覽みん者、其の猥雜を嗤うこと勿く以て兩端を叩くの志を逆えば可なり。

ついで「詩語」についても「文語」と対比して、次のように言っている。

詩語之於文語、有字同而義同、唯既之類是也。有字同而義異、雖然雖是之類是也。有字異而義同、文之則詩之自是也。有字異而義異、好是聞道之類是也。

詩語の文語に於けるや、字同じくして義同じき有り、唯・既の類是れなり。字同じくして義異なる有り、雖然・雖是

の類是れなり。字異にして義同じき有り、文の則・詩の自是れなり。字異にして義異なる有り、好是・聞道の類是れなり。

挙げられた例の当否は別として、これらの文章からは散文に用いられる語と韻文に用いられる語とを区別しようとする意識が明瞭に見てとれる。

〔付記〕

本稿は、平成二〇年度科研費・基盤研究C（「杜甫の詩語に関する基盤的研究」課題番号一九五二〇二八五）による研究成果の一部である。